





蕭



丹應寺

坊間村の東の山向の山形洞窟の元あり
 井の跡とて武田の跡とてふれが所とて
 又前をせし北の山向の山形洞窟の元あり
 井の跡とて
 牛の跡とての下に井ありふれ坊間の井とて
 新慶井とてふれ坊間の山形洞窟の元あり
 又ふれ下東の山形洞窟の山形洞窟の元あり
 何れもふれ坊間の山形洞窟の井とてふれ坊間の山形洞窟の元あり
 定めてふれ坊間の山形洞窟の山形洞窟の元あり
 坊間の山形洞窟の山形洞窟の山形洞窟の元あり
 坊間の山形洞窟の山形洞窟の山形洞窟の元あり

石井 田の
北 研

北豊崎即本陣村を抜下とふ必道路の角あり
い墓也と云ふ校碑

長一尺二寸
巾上五寸
折欠

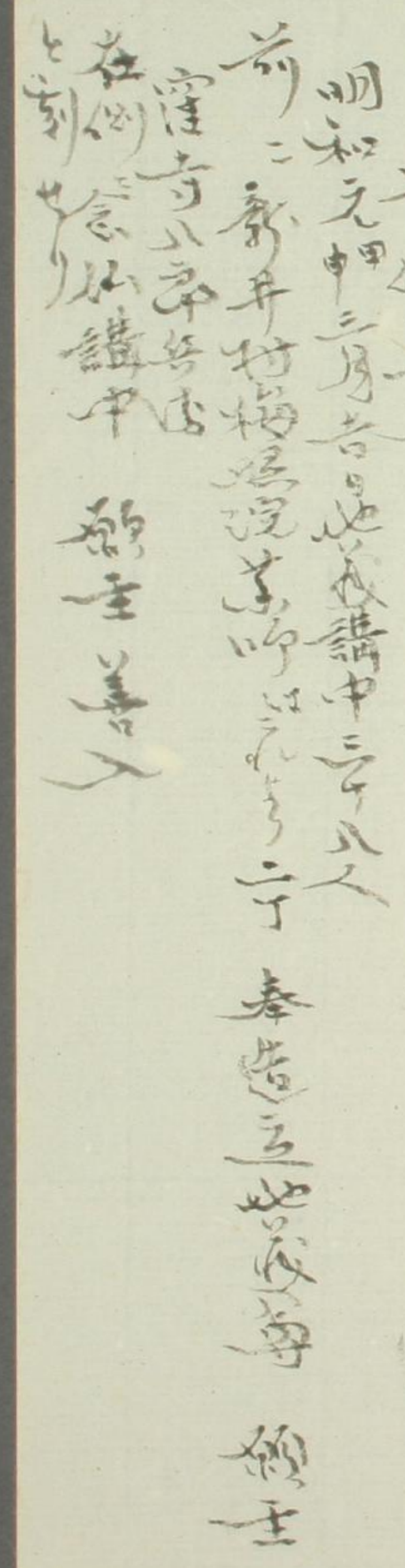
明戶五
道禪
七月
七月

長江
道吉
二月

世
 中
 左
 通
 新
 欠

清
淨
土

又新無野の座敷に板解種々の分のこの数斤一枚あり
外破片三四枚年疏を數欠あり右寸大蛇なり



和宗公九左衛門と云ふ其服公ありその名ふを好
 法人疑ふなりしも其年の大工宗元左衛門が子なり
 元義と云ふ者ありなりなりなりなりなりなりなり
 能々其國州亦郡清水并村等の内田寺前と云ふ
 あり其地にもおちたりおちたりありて下馬也
 下馬せざるが常なりなりなりなりなりなりなり
 世の中は然り梅のなかりせば春のころとのごとく
 のふせしななりなりなりなりなりなりなりなり
 名のお代大和國歌京の都なりつとされ雅極言と云ふ
 なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
 して名けえと云ふなりなりなりなりなりなりなり

異年弘文福徳祿をあれと
 西光寺跡とて又枝碑あり正文の年弘文と
 かく敏能より重光の必とて又枝碑の家の家ありその
 にあつとも又古の敷花をよむとて又明弘文年同録
 十七慶應二年四月廿四日弘文の改元の改元
 年弘文寺と改元ありとの弘文成をなすと然もまた
 石心と稱す又天保十六辰十二月四日日本橋通邊
 寺が年号を改し四文と稱りたり改政とあり
 弘文が弘文の弘文二年年前に多摩川の古跡を
 弘文あり多摩川の南岸多摩見たり弘文の古跡を
 東端の古跡大森より久々原力に及ばぬの古跡を
 雪ヶ谷の古跡下沼部の貝塚多摩川を越ても

千年船

と云ふ
まゝのやう千年船といふは、
の船をもちて、
すゝと一服の酒をもちて、
の酒をもちて、
又毒原糖といふて、
と云ふは、
あつと長き船をもちて、
一服と云ふは、
観るべきやうな、
船のつくり、

此の山

駿河國元記と云ふは、
云々、
右駿河國元記、
向者、
あつと、
唐野姓、
陳々、
生々、
當之下、
並、

此山に記をぬけり 夢ゆに万端ありと云ふ

鳥渡郎の中 和泉歌あり

有妙井其底に又金早水不枯洪水不増常有小蟹
数頭住井底取之不盡其味如甘露

中鳥渡郎
有妙井

大田南畝七女蔵のゆ桃の寄て伝じあり

南畝の七女
のゆり桃

日本金桃重なり
盤中碩果無人食

仙原河必武破津
花葉花雨七十春

又南畝より中畠某に送りし書簡に云々
書は是しとほを貴しあやう多き讀まずと云ふ

と云ふはこれのことなり

南畝の七女
平治の乱

海にわたりて我々の強弱にても妙と雖も誰れと云
ふも自らもに明なりと書きたる後のもつても保元平
治の乱にても又然るにこれに二十の年なりと云ふ

南畝の七女
平治の乱

見は 今井兼朝 河津三善 佐山 國俊 明下
谷川 十清 大田 金井 内 多摩 前 中 山 信 久 山
知雄 又 赤 而 と 云ふ 戸 田 久 隆 下 河 也 長 流
安藤 為 幸 持 井 千 代 持 石 依 妙 乃 因 春
満 ち 少 なる 契 中 興 開 馬 士 石 成 幸 有 智 長 伯

袖留祝
いふべ

香の貴きものなり 又千藤、多く香梅、
少なり 井上玄妙、多く黒川春村、少なり
えふ、いふ、多し、少し、のち、又、ふれ、と、
之、あり、千枝、と、ふ、人、の、あり、信、友、の、あり、
祐、と、い、多、く、成、年、の、多、く、数、あり、如、想、の、有、如、想、
子、あり、と、
徳川家紀萬治元年十一月十三の條、袖留祝と、
右馬頭綱重の袖留の式行はる、い、い、河、
後、言、思、い、の、通、り、時、服、と、種、二、つ、か、は、る、
と、あり、袖留祝、い、ふ、る、は、如、想、い、ふ、と、
尋、ね、る、と、い、ふ、じ、

針をさす
呪

日光の走大とて、遠く、張、定、の、ふ、針、を、い、せ、
人、の、い、家、を、さ、す、の、い、す、
和歌、
別、あ、く、あ、く、
これ、は、明、鏡、の、願、長、康、と、い、ふ、の、女、
女、家、の、い、事、に、
女、の、い、書、と、其、物、の、い、
さ、つ、女、や、く、と、
事、さ、す、
と、い、ふ、針、を、
又、の、物、の、い、
針、を、さ、す、の、い、

松

のまゝに馬をふくむ。あつたす何れのう節の可枝
 あまん馬をふくむ。馬の夜中なる。
 茹子と由ては、いもどきとをこれ信ぬ小武
 也。その如の煮芳を湯で念ふ。あるとふれし起る
 名なり。又子の日の題を引く。さるし景を急
 いしものなり。上種のもの一種にて年中行事秘妙猶
 何れの本に見えたり。今もふると信濃平小野那の
 人の物語なり。と云明を後撰集新抄
 山彦丹子彦部信者菅家文庫巻六予亦嘗聞
 于古老曰。上陽子日野好威光其事如何其義如何。倚
 以樹以磨腰羽風霜難犯和菜羹而咽之期氣
 味之充調とある。舒が考といへん。さうづ偽以樹以

重鋁重韻
重形の鐘

司馬溫公家訓出典

腰を痛むは下より仰りて腰を痛む事のかういふやうなれ
 ども其の子の日は野越して引たるいぢして身痛むをいふ
 べ次のあふふ如菜羹とあるにかなふ然るもいふが痛字は
 だかかきとていふこころさういふあはれとていふ腰を痛む
 といふ同じいふいふとあり
 高太夫神楽寺の鐘三重三井の川城寺の鐘三重
 器のうら平号院の重形とて其の三重鐘なる説
 明せとていふ
 空のいふ是が如く前書せし得てし其の氣は細く空
 とていふ其の如く其の如くものなること
 司馬遷の如く一積金以遺子孫子孫未だ少積書
 以遺子孫子孫未必讀不如積德積德必具之中

源平盛衰記
の
福徳元年三月三日

以乃子孫長久之計此先賢之格言乃後人之龜鑑
密菴居士言出が米菴の書場必あり哉
一也成源平盛衰記に西光の力に有難き御起り
七道の世に三體の必成者有るを言ひ奉り奉り
二も道場を攝す大忠の每後う居るを廻る必成
名は三味經に云ふこととの文あり又必成のとは
何れを云ふに四月より五月を食か湯の神をぬて成を
いふもも
素より福の生れはつるを向ふ福徳元年三月三日
寅の一天きのとの卯やううくといふ誕生を云ふ
そより由喜の自吉に云ふ

四石仲形
鐘銘

四石仲形所為念す様丁の事初山安養院
鐘銘及鐘寸八寸二寸
一大鐘の寸八寸二寸
本刹の鐘は昔應永己未十一月下七州野錦人
寺者發願經始之治工同州大興人喜入道光河
寺鑄銘銘而藏鎮長福寺至元初種朝宗寺元朝
文光重道新重京善慶寺等心與其寺寺永宣而
年夏四月下總州東嶋郡堺邑正覺山如來寺住持少
門徒空頼主有殊及得芳等請之於長福寺時摩
麻寺希得繼易得之備如喜寺常住法為寺鐘面
之師即見子磨成之銘者乃今後數年展轉為本

壬子の七ノ月

ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ

音無川

石神井川

二本橋

装束橋

からりりの権現

おんいふおんいふ

新屋敷

ふか何ふ話しあふて二日あつた

壬子の七ノ月

ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ
ふか何ふ話しあふて二日あつた
うふふか知れあふのきほきあふ

久能寺の法華寺のものと左の法華寺のものなり
 録寺の法華印

此の法華印なり

新子組
 録寺の法華印



系原の法華寺の法華印のものと左の法華寺のものなり

久能寺の法華寺のものと左の法華寺のものなり
 録寺の法華印
 此の法華印なり
 新子組
 録寺の法華印
 系原の法華寺の法華印のものと左の法華寺のものなり

神田天中雛菓子
 彩を下の如く



神田の雛の如く
 彩を下の如く
 雛の如く
 彩を下の如く
 雛の如く
 彩を下の如く

女三子ね起屋ハめあをて成向味好
 ね起ハ言度先生の書ハ多ク大雛
 雛の如く
 彩を下の如く
 雛の如く
 彩を下の如く

鐵山ハ神原式部大輔高進馬天正十七年
 古川の風呂屋なる一向の宝也といふ
 雛の如く
 彩を下の如く
 雛の如く
 彩を下の如く

武藏國縣社 御由緒概要

武藏國縣社 御由緒概要

御祭神 櫛玉饒速日命 八千矛命

御相殿 菅原道真公

合祀 天穗日命 加屋野姬命 應神天皇 日本武尊
櫛玉饒速日命。神武天皇東征し給ふや命出で迎へて逆徒を征し、御子可美真手命と共
共に恭順よく天朝に奉仕し給ひしかば、天皇の寵用益々篤く可美真手命をして内物
部を率ゐて専ら殿内の宿衛に當らしめ給ふ。これ實に物部氏の始祖なりとす。され
ば軍神として世人の崇敬殊に篤し。因に物部天神社は國內鎮座する所甚だ稀なり。
八千矛命。大己貴命の亦の御名なり。俗に大黒様と崇稱す。此の神の威徳寛仁にお
はしまし、且勇武他に勝れさせ給へば御武徳の方面をたへ奉りての御名なるべし
されば悉く不逞の徒を平けて國中を定め、山野を開拓し、池溝を堀り、川澤を疏通
し、民利を進め、民福を興し、醫藥の法を始め、禁厭の術を定めて、大に國土を經
營し、民人を撫育し給へり。後ち天孫降臨の際に大己貴命が獻國退讓の一事件は、
我が神代史中に於ける極めて重大なる出來事にして、命が一意恭順を体して敢て其
の分を乱り給ふ事なかりしは全く其の大義名分を辨じ給ふ事の明確なりしに依り、
後世の者愈々益々我が皇位の無窮に神聖にして且尊嚴なるを仰ぎ、又此の神の功勳
威徳の萬古に盡さざるを仰ぎ奉るべきなり

武藏國縣社 御由緒概要

菅原道真公。參議是善公の第三子にして其先は天穗日命の裔野見宿禰より出づ。大
宰府神社御事蹟は世人の能く知る所なれば京都北野神社を初めとして、諸國に於て
天滿天神として、所謂天神様の名は三尺の少童と雖とも是を知らざる者全くなしと
言ふも敢て誣言にあらず。依て其の御事蹟は茲に之を略す。

御鎮座 神社は景行天皇の御宇、日本武尊東征の折創建し給ふ所にして、櫛玉饒速
日命、八千矛命の二神を祀り物部天神社、國渭地祇神社と崇稱せらる。何れも延喜
式内社たり。後ち欽明天皇29の御代神託に依り、小手指明神を物部天神社に合祀す
又一條天皇66の御代菅公五世の孫菅原修成武藏國守なりしが、當時勅命を奉じ京都
北野神社より菅公分靈を此地に鎮祀し、坂東第一の天滿宮と定めらる。時は長徳元
年(一六五五)にして、村上天皇六二代の天曆元年京都に祀り給ひしより、實に四十
九年の後なり。此より小手指の地名を北野と改稱せり。當時は物部天神社、國渭地
祇神社、天滿天神社、何れも三字の社殿を備へたりしが、何れの年代よりか今の如
く一社殿とはなりたるなり。然れども社名は依然として變更することなし。〔此事地名
見爾來一括して俗に北野神社と稱す。〕

源賴朝公文治年間奥羽平定報賽の爲め悉く社殿を改造し、同時に鎌倉鶴ヶ岡八幡宮
の分靈を當社へ合祀し、加之當社領舊來二千貫文なりしを尙二百貫文増加し、更
て二千二百貫文の社領を寄附せらる。其他鎌倉管領足利氏滿等代々武門武將は深く
當社を尊奉し、屢々社殿を改造し、神田神寶等の寄附を初め、特別の敬意待遇を表
したる事は別記一社傳來の寶物古文書に徴して明瞭なり。(近くは徳川旗本御小納戸
役花井權藏氏神殿内宮を寄附し、且明治維新迄歳々御供米一石を奉納す。徳川政府
に至りては朱印五拾石を寄附し、及修繕向は官費支辨と定められたり。殊に家康公
には天正十九年參拜紀念として櫻一株を植えらる。糸櫻と稱す。其の外、日本武尊
御手植の尊櫻、前田利家卿天正十八年社殿造營の際植えられたる大納言梅、尾張國
主光友卿手植の中納言松等何れも今尙繁茂し、境内の如きも維新前に在つては面積
六萬坪、並に朱印の外除地貳萬壹千九百坪を有し、總べて除地内は下馬下乗の制規
あり。(現今境内貳千有余坪)明治維新に至り社領奉還し、因て遞減録を賜ふ。前件
由緒ある古社たるを以て明治廿一年保存資金下賜せられ同三十四年縣社に列せらる
(其他は江戸名所圖繪、風土記等に委し)

末社明治維新前には廿五社ありしが今は左の數社なり
諸神宮、祭神は延喜式内三千一百三十二神にして源賴朝公奥州平定報賽の爲め建久
六年九月十九日創建して諸神堂と稱せらる。後ち慶安年中徳川家光公より宮號
宮を賜はり。同家判物にも記載ありと風土記にも見ゆ。
石宮神社、腫物、眼病其他傷病に靈驗著しとて信仰する者夥し。
文子天神社養蚕機織の守護神として神徳を仰く者多し
其他八雲神社、稻荷神社等あり

三月廿一日例祭レサイ 古例として遠近學生の封レウジを稱するもの及び幟を奉納する事今尚ほ盛なり。
トシゴヒマツリ
ニナマツリ

舊蹟
御手洗井 日本武尊堀兼の井に至り給ひし時、古老來りて尊を此地に導き奉りしに果して青良と尋ねて專ら。

御神寶 重なるものを舉ぐれば左の如し

一營公御一代の畫七幅
作者 元龜三年(一三三二)當郷山口城主山口平四郎資信奉納
周防國山口眞如寺住職富ノ雪齊

明治十六年四月明治天皇陛下飯能演習行幸の際行在所に於て天覽を賜ふ

菅公御自筆法華經壹卷並宗近太刀壹口。天正十八年二五。前山大納言和家奉納。

尾張中納言光友卿寛永十七年二三〇當社參拜記念の自画

一一品幟仁親王御眞筆の額
社号及御名

古文書

一建久六年（一八五五）九月四日
一應永四年（二〇五七）八月十五日

一 弘治元乙卯年(二二五)四月三日

一永祿十丁卯年（二二二七）霜月廿三日

一天正十七巳丑年(二二四九)卯月三日

天正十八年六月

天正十八年六月四日

正十八年七月五日

一丑卯月八日(慶長六年なるべし)

一朱印證家康公ヨリ明治維新迄

大正五

不許

大正五年

發行所

不許復製

大正五年三月十日印刷

栗原正五郎

大正五年三月十五日發行

青山活版所

發行所 武藏國入間郡小手指村大字北野 北野神社々務所

大字北野 北野神社々務所

北野神社ヨリ

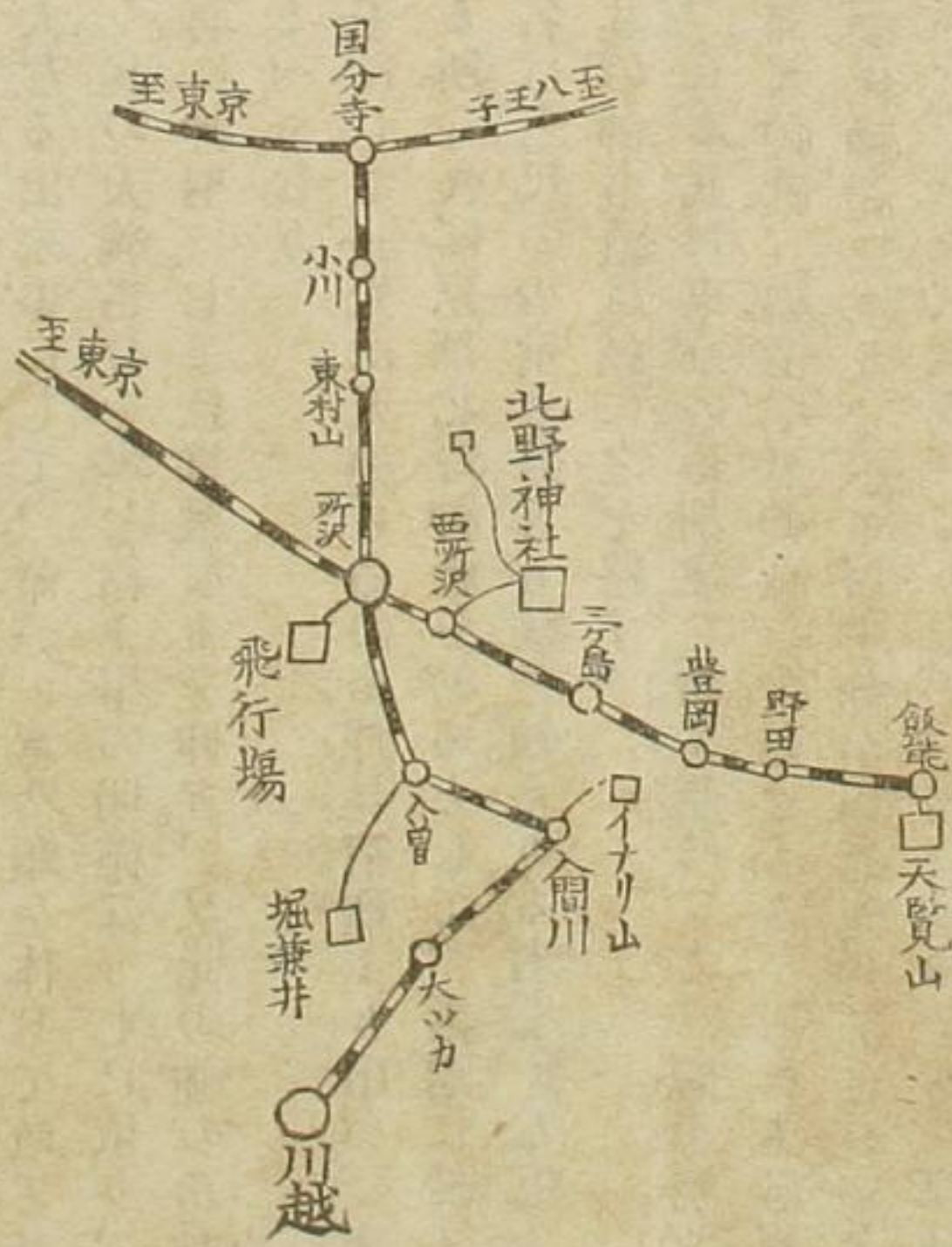
西所澤驛へ十五丁

所澤驛へ一里

飛行場へ
廿五丁

堀兼井へ二里

所澤町へ十七丁



武藏國縣社

國渭地祇神社
物部天神社
天滿神社

御由緒概要

此處來り給ふ不圖被冒疾日増長飲食共之廢
御命危く見給ふ近臣悉周章于時時宗公破
作之執今為救生此處來り病死也當之地獄可隨
為予六道能化地藏觀音可念と有れ臣下共異口同聲
右名號念奉君心中名号陀羅尼唱給其夜乃
四更の頃黃衣僧一人右手錫杖持左手三粒の丸藥を持
來君怪思召貴僧何處より來り給問僧の曰此邊
草庵居り存命不過三日此藥を服給て延命
と云左手丸子賜て是服思て思萬病病悩平癒

如亡御感悅不淺是即地藏菩薩摩訶薩一明早旦
相尋て與中風事共具語給て悉皆奇異思
は夜の明り持て近邊を尋る此所小堂有りて内
財延命地藏菩薩摩訶薩一此の是即此菩薩也
夢をらんといふ西寺敬奉之尊錄倉より飛驒内而
被召即當寺御建立あり法海禪師請て為任職
是故唐の經山興聖禪寺本師佛海禪師と勸請
して開山一方便三手予親觀也予亦菩薩と安
置奉元雲專以作也地藏尊右手金剛杖と執給

故三金剛山より大地藏尊の別名と悲願金剛又與願
 金剛秘法也左手より紫髯の如く見し可如意室珠予て二
 此尊の如護來正福得故正福寺と名付也其以来西
 度迄金逢回録火佛殿に無恙古老云其御他村の人見之ハ
 堂の棟に數百の僧首て火を焼くと足跡不滅の地藏尊也と謂
 傳云且當寺佛殿の如く其堂に總倉圓覺寺舍利殿深
 州虎溪山外更度北條家已來御當家御代々
 御朱印破下置候故天下安全御氏運長久之御
 祈禱無懈息相勤者也

北條氏ゆけの墓

北の津はまて

二尺八寸

二尺八寸

二尺八寸

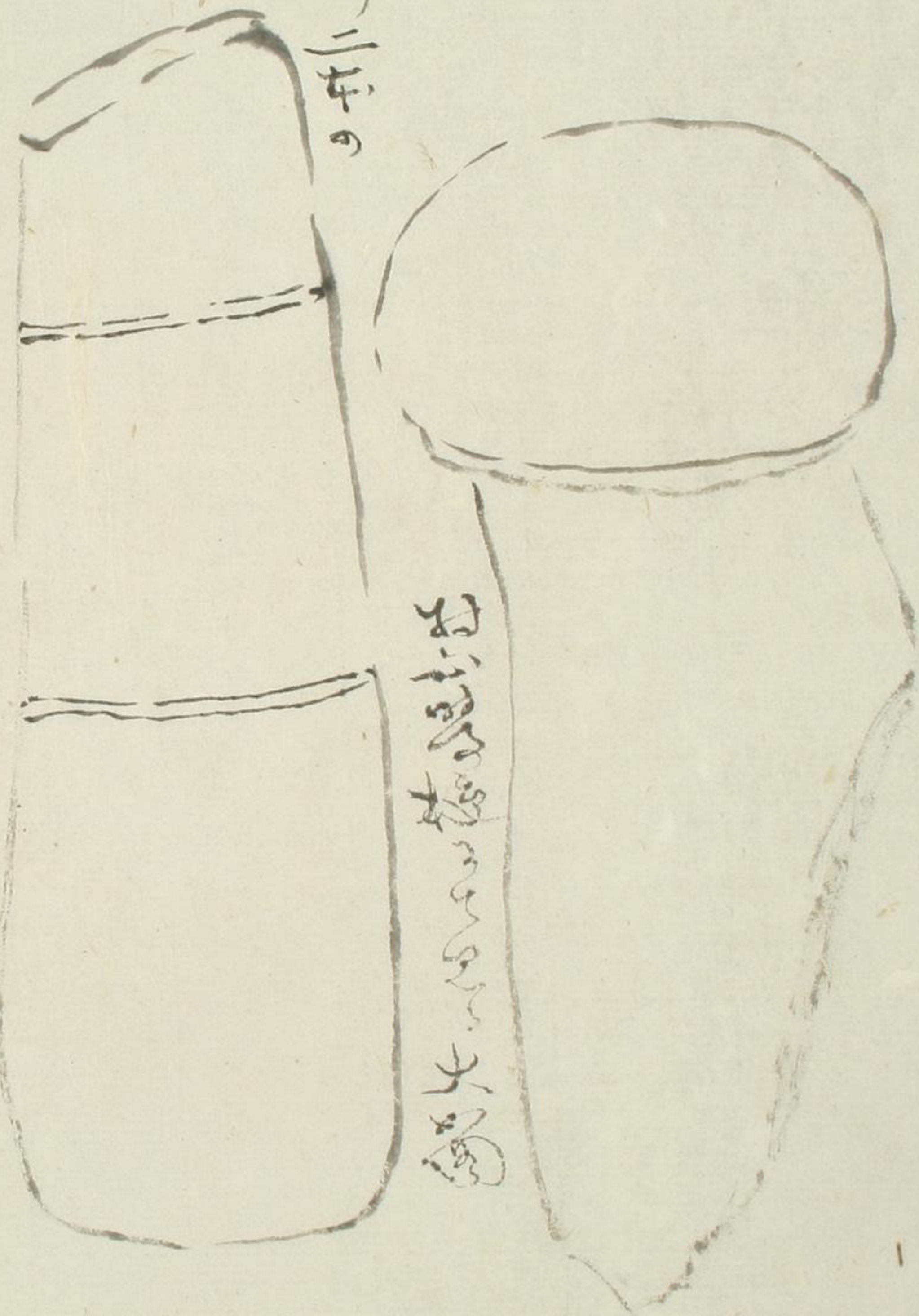
三寸

妙

おんぎふてん

大

此石茶二升の
節那
也多

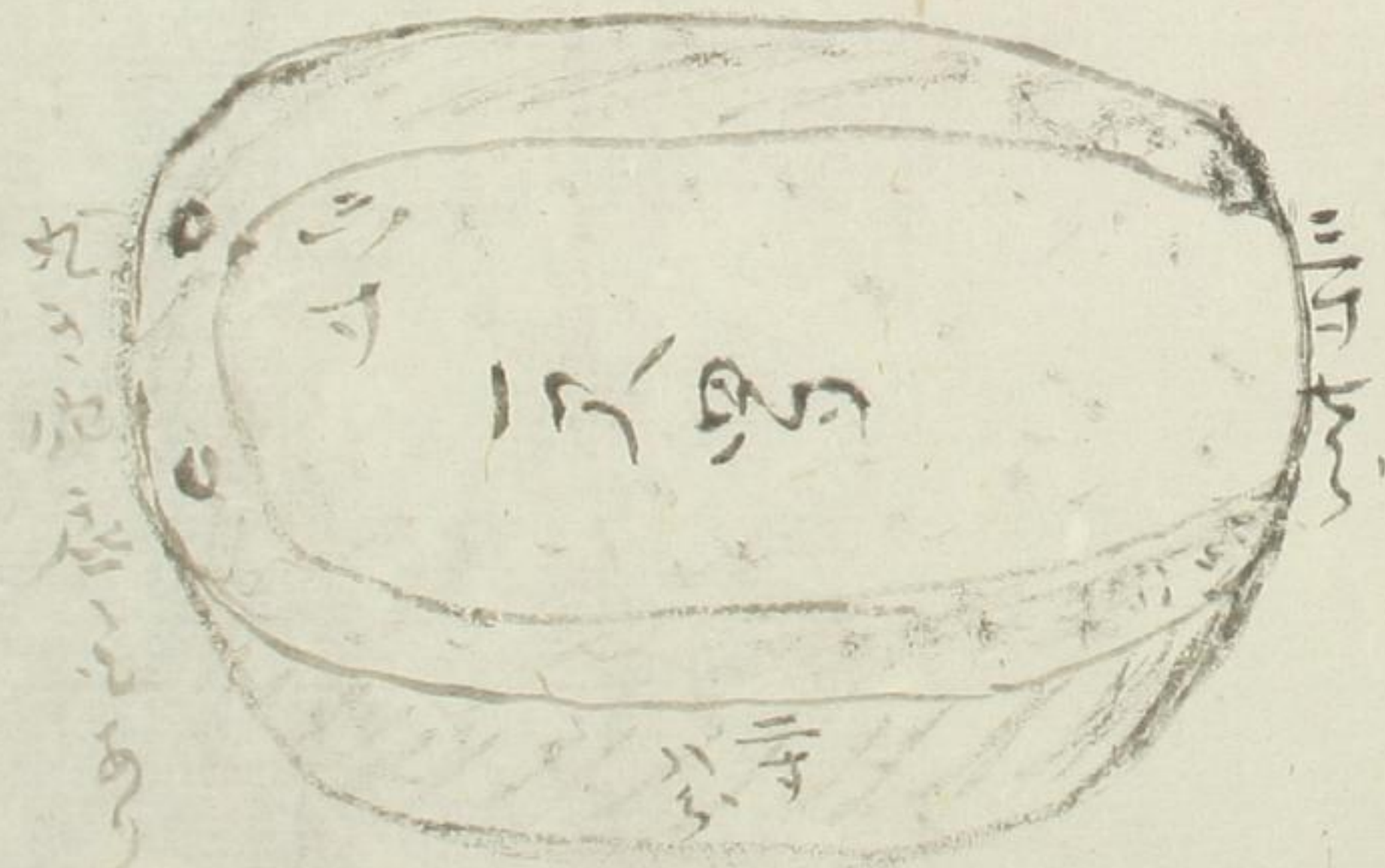


此石茶二升の
節那
也多

下は石茶二升の
節那
也多

光
明
永徳二年十月三日
大師
惠後

此石茶二升の
節那
也多



此石茶二升の
節那
也多

安持神の紅蓮二本の火の如く燃ゆるを
 國の二本の如く燃ゆるを
 結成するを
 安持神の紅蓮二本の火の如く燃ゆるを
 國の二本の如く燃ゆるを
 結成するを
 安持神の紅蓮二本の火の如く燃ゆるを
 國の二本の如く燃ゆるを
 結成するを
 安持神の紅蓮二本の火の如く燃ゆるを
 國の二本の如く燃ゆるを
 結成するを



安持神の紅蓮二本の火の如く燃ゆるを
 國の二本の如く燃ゆるを
 結成するを
 安持神の紅蓮二本の火の如く燃ゆるを
 國の二本の如く燃ゆるを
 結成するを



安持神の紅蓮二本の火の如く燃ゆるを
 國の二本の如く燃ゆるを
 結成するを

村の西の角に菜場と名の
 如く筑高本者竹と名
 新井の盛土のま
 ちの北の如く
 古本平谷環を
 多てうみ谷環を
 初言とす言ふと七日の
 水と初言とす言ふと七日の
 村の西の角に菜場と名の
 行しうかあひまき節もつと一と女ものさすものと名



送
 要
 歌

村の西の角に菜場と名の
 如く筑高本者竹と名
 新井の盛土のま
 ちの北の如く
 古本平谷環を
 多てうみ谷環を
 初言とす言ふと七日の
 水と初言とす言ふと七日の
 村の西の角に菜場と名の
 行しうかあひまき節もつと一と女ものさすものと名

三月三日
三月三日
三月三日
三月三日
三月三日
三月三日
三月三日
三月三日
三月三日
三月三日

[illegible]

十二月八日奉

古成象大
道子孫九師

人形筆

陳煥文

尾州の古銭家、大道寺孫九郎直良といひ、其
の用する高七石を端し、明弘十年の改鑄
鬼頭久吉十三万のい大道寺の小侍、まが錢に要す
用じりやと云ふ。
天和三年壬戌九月、枚の右馬より改鑄る人形筆
の事を載せ、其文に「五色の糸を以て其軸を穿く管頭
に之を挿み、あり筆を手にとれむ出納は軸の内にて是
ちん人形筆」と云ふ所あり。
あつた或とうこころをすりとは人形筆との名をある重宝
物より人形筆の効かた一筋の糸のあやつり
二好
ともう古き既製の筆と名ぬ
大同書に漆楊枝といふありらじといふ才をあきらか

心經を十二
通と云ふ
と云ふ

鎮西神戶總司候、左方の宮地、房院、真言、一切經
七、如、通、まゝ、通、あり、これ、天台、大、小、の、十五、通、まゝ、さ
れ、し、と、い、ふ、は、大、小、の、影、を、し、た、ま、い、て、妙、の、十二、通、は
已、に、あ、る、と、い、ふ、は、と、い、ふ、作、り、と、い、ふ
此、の、如、果、弱、い、心、經、を、三、通、と、い、ふ、は、行、戒、止、人
の、為、に、さ、う、と、い、ふ、は、一、經、に、三、通、と、い、ふ、は、無、窮、の、事
し、と、い、ふ
王、勝、阿、彌、陀、佛、の、建、曆、元、年、四、月、廿、三、日、以、一、万、衆、人
僧、侶、一、日、一、切、經、を、寫、供、養、道、場、中、前、大、僧、正、雅、紀、と、い、ふ
人、れ、に、さ、う、と、い、ふ、は、大、小、の、經、を、三、通、と、い、ふ、は、無、窮、の、事

心經を十二
通と云ふ
と云ふ

心經を十二
通と云ふ
と云ふ

大、心、の、年、廿、月、十、日、と、い、ふ、は、古、く、は、房、院、總、司、と、い、ふ、人、
の、寄、り、に、た、り、と、い、ふ、は、心、の、經、を、三、通、と、い、ふ、は、無、窮、の、事
三、通、と、い、ふ、は、無、窮、の、事
富、山、仙、前、田、山、南、姓、管、原、任、大、藏、大、輔、負、富、元、祿、間
人、嘗、大、搜、索、古、錢、著、此、號、定、路、及、此、據、數、苑、贊、三、通
古、大、新、時、云、夢、志、本、泉、建、寺、廣、世、韻、事
洪、先、生、通、字、景、嚴、宋、人、官、初、書、閣、學、士、知、制、誥、明、季
寶、防、金、賊、平、議、文、安、著、泉、志、蕭、雙、ハ、隱、集、東、陽、志
寶、防、山、仙、前、田、山、南、姓、管、原、任、大、藏、大、輔、負、富、元、祿、間
福、知、山、仙、前、田、山、南、姓、管、原、任、大、藏、大、輔、負、富、元、祿、間
初、近、と、い、ふ、は、大、小、の、經、を、三、通、と、い、ふ、は、無、窮、の、事
悟、泉、為、大、小、の、經、を、三、通、と、い、ふ、は、無、窮、の、事

如來寺の
瑞光

藏鑒可宗而世之下後身破共

幅画二及賛者の名なり
 又製古銭藏出し
 るに僧のやゑるなり
 の銭なりしゆえなり
 尼のこゝにこの銭あり
 亡父の子は解けり
 能くすと臣某は銭を
 強んと欲するの意あり
 欲せしに安んずる者
 る何んの意ありや
 成るをんと云ふに尼
 世に世に世に世に

何れも心願すも、ものごとく申さず、一佛寺を建て、五七の
 忌に、臣等も参りて、佛にまかせ、身の何事をもなす
 と強て、何れも忌を参りて、佛にまかせ、身の何事をもなす
 何れも心願すも、ものごとく申さず、一佛寺を建て、五七の
 忌に、臣等も参りて、佛にまかせ、身の何事をもなす
 と強て、何れも忌を参りて、佛にまかせ、身の何事をもなす
 何れも心願すも、ものごとく申さず、一佛寺を建て、五七の
 忌に、臣等も参りて、佛にまかせ、身の何事をもなす
 と強て、何れも忌を参りて、佛にまかせ、身の何事をもなす

部經
部經
部經

尼中へふるを中述へるものなりと言ふが如き
 寺を建てたれども今ありふるより一寺建立ありて本
 泉の泉より奉じたる考を本泉寺と號せしとの逸
 話古録に記しありて「富の二三の人の寺の寺
 寺を建てたる所を尼寺とありて本泉寺の寺を
 寺とありてふるを中述へるものなり」といふ
 寺の寺を建てたる所を本泉寺と號せしとの逸
 話古録に記しありて「富の二三の人の寺の寺
 寺を建てたる所を尼寺とありて本泉寺の寺を
 寺とありてふるを中述へるものなり」といふ

長

三
 鹿嶋大神宮寺
 奉納妙法蓮華經一巻を奉納するに
 嘉永三年四月廿二日大願寺主事等
 九
 分

同重而銘に

口口口口口口

口口口口口口

口口口口口口

口口口口口口

口口口口口口

部經
部經
部經

とありふるにふるを中述へるものなりと言ふが如き
 寺を建てたれども今ありふるより一寺建立ありて本
 泉の泉より奉じたる考を本泉寺と號せしとの逸
 話古録に記しありて「富の二三の人の寺の寺
 寺を建てたる所を尼寺とありて本泉寺の寺を
 寺とありてふるを中述へるものなり」といふ
 寺の寺を建てたる所を本泉寺と號せしとの逸
 話古録に記しありて「富の二三の人の寺の寺
 寺を建てたる所を尼寺とありて本泉寺の寺を
 寺とありてふるを中述へるものなり」といふ

奉^上勅佐岳谷白水長壽寺表道
(奉) 至徳元甲子十一月八日 父苗

近藤守重之墓所

近藤守重之墓所 近江國高嶋郡大溝村瑞雲院
自妹院後奉^上勅遷葬定門
至十二日三月十有六日
近藤守重之墓
其墓之改也如左 之を見

近藤守重之墓所

近藤守重之墓所 近江國高嶋郡大溝村瑞雲院
自妹院後奉^上勅遷葬定門
至十二日三月十有六日
近藤守重之墓
其墓之改也如左 之を見

近藤守重之墓所 近江國高嶋郡大溝村瑞雲院
自妹院後奉^上勅遷葬定門
至十二日三月十有六日
近藤守重之墓
其墓之改也如左 之を見

近藤守重之墓所

近藤守重之墓所 近江國高嶋郡大溝村瑞雲院
自妹院後奉^上勅遷葬定門
至十二日三月十有六日
近藤守重之墓
其墓之改也如左 之を見

近藤守重之墓所

泉ちなりとてや

入重山三童謡（古琉球）

月の美しや十三日て女美しや十七

こればかりの南島なりとありや
ふれども見るるに猫老

白の夢

丁玉細村龍宮とて
いありしもの
さあといふ

億語集

江戸億語集

鑄鐵屋の天秤棒

おけんの天秤棒の先

伊勢屋

伊勢屋の天秤棒の先

あがりのもの

いかげのもの

江戸時代

只とて無代物のもの

然

事物を見ても買ぬ人々を
うぬ（其隠語は上方の隠語なり）

花屋の柳

送元
の
見
世
を
う
柳
か
植
て
あ
じ
る
屋
之
や
う

甘雨

斤々あり
斤々あり

日光の東

著

北の角を北鳩と云ふ

二
に
た
ん
こ

にがんに
てけんの
こひの
こゝろに
あはれ
をいふ
こと
なほ
ある

本心之學

新刊

今

第七号 神文の解説

へな 猪つきの者せきいふ

常々
 常々

7

南ミナミに子コ恵エ銀ギン

冬瓜に目鼻

冬
ふ
が
つ
た

豆腐にかす

美の字を工者とふはして

三
つ
か
り
し
て
こ
ろ

瑞雲寺願

白好をこゆなり田麿の女

坂土の多くを占めてゐる

一尚みかぬと

嵐六足
犬猫まぬ

わらみんのはんだい

むくろ

おもしろいものがある

夢中になりてなると
似合はなニヤツ

馬鹿ですわい
馬鹿見えて

田舎者の話とて

雲州の旦那

楊活の太木

鬱金ののはちま

うしろの雷

雲のやみかたは種な

太りて大いけを破る

気がうしろの黄が

嫌い 黄雷

青い残りの熊子
内服膏

蚤の夫婦

黒幕
首文

山櫻
家根屋

おかしな林の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影

おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影

出陣
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影
おかしな男影の影
おかしな女影の影

山燈
の
豆腐
神

鑛物
の
雪隠

山の
の
り
る

細
長
家
子

取
弱
か
き

二才差

矢居
太田
臣の
家
つ
保
で
あ
る
ゆ
え
に
ち
と
し

亭主のろくでも無き女房のふ

曲

七のまより七條通より七の
の起り七の又今の一六銀行

通
炭野亭

献
二
の
鵲

靴
二
の
甲
は
足
を
結
い
筋

正安、あつたし、ふ服古の人

怒り
 火のちうり
 やす
 初鹿野
 炭と

久
 久
 錢
 又
 文
 口

忍の道にのみ致さぬ
 音とふ字はゆる文久成る

胡椒の丸
を念のち
腰巾着

高麗が塩辛を尋ねて
天井がきな匂い
赤くつ
淡黄意
青灯のふり
青瓢箪

かういふことをいふ事の時
常なる湯はしるしの水である
後あるいふ人々の世の
にかゝるの甘みなど
鼻の穴があいて居る者
田舎者 赤い顔を
田舎者 赤い顔を
赤い顔を
赤い顔を

三
西行

西行の国へ
さこのとて

金持の火事見舞
木場の豆
照師屋

めかーちよんくの十

中向の者 三つ一人持て
及職の力をする者
微弱の心 魚の仲間に入りてある者
真なる物 赤い顔を
手長海老の姿
張るふし 女をばなをばな
助平 目力一の十を組合す

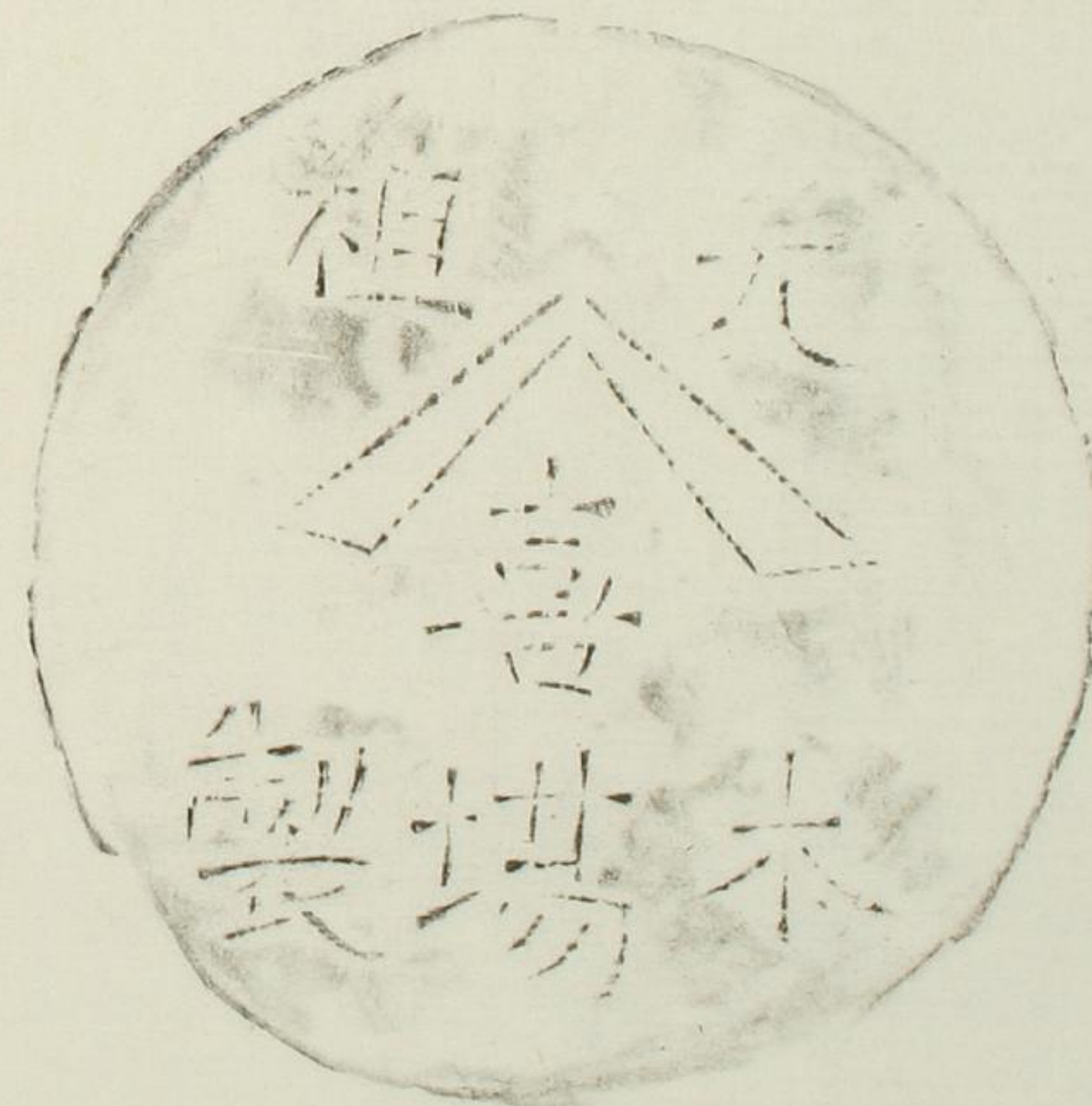
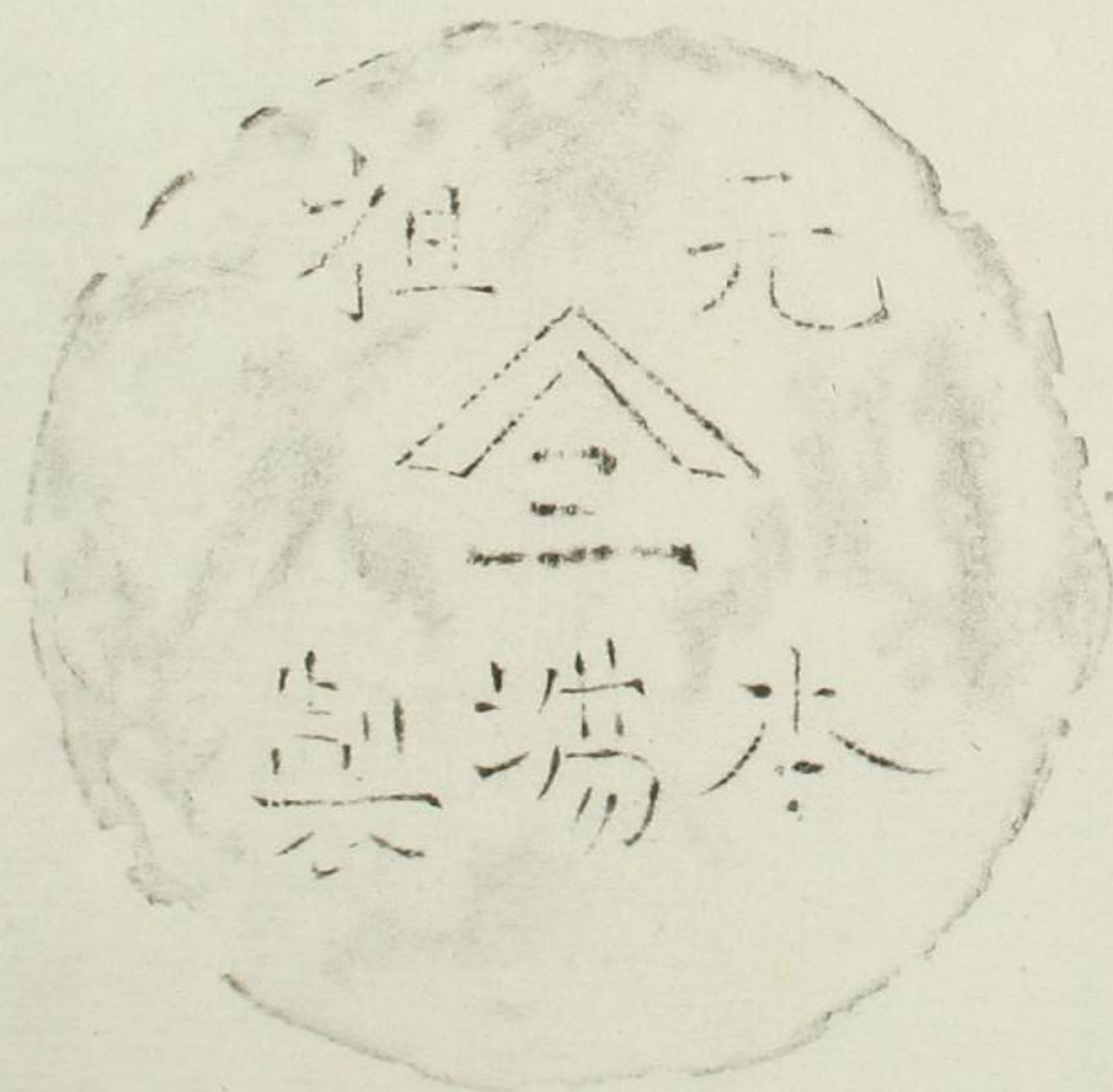
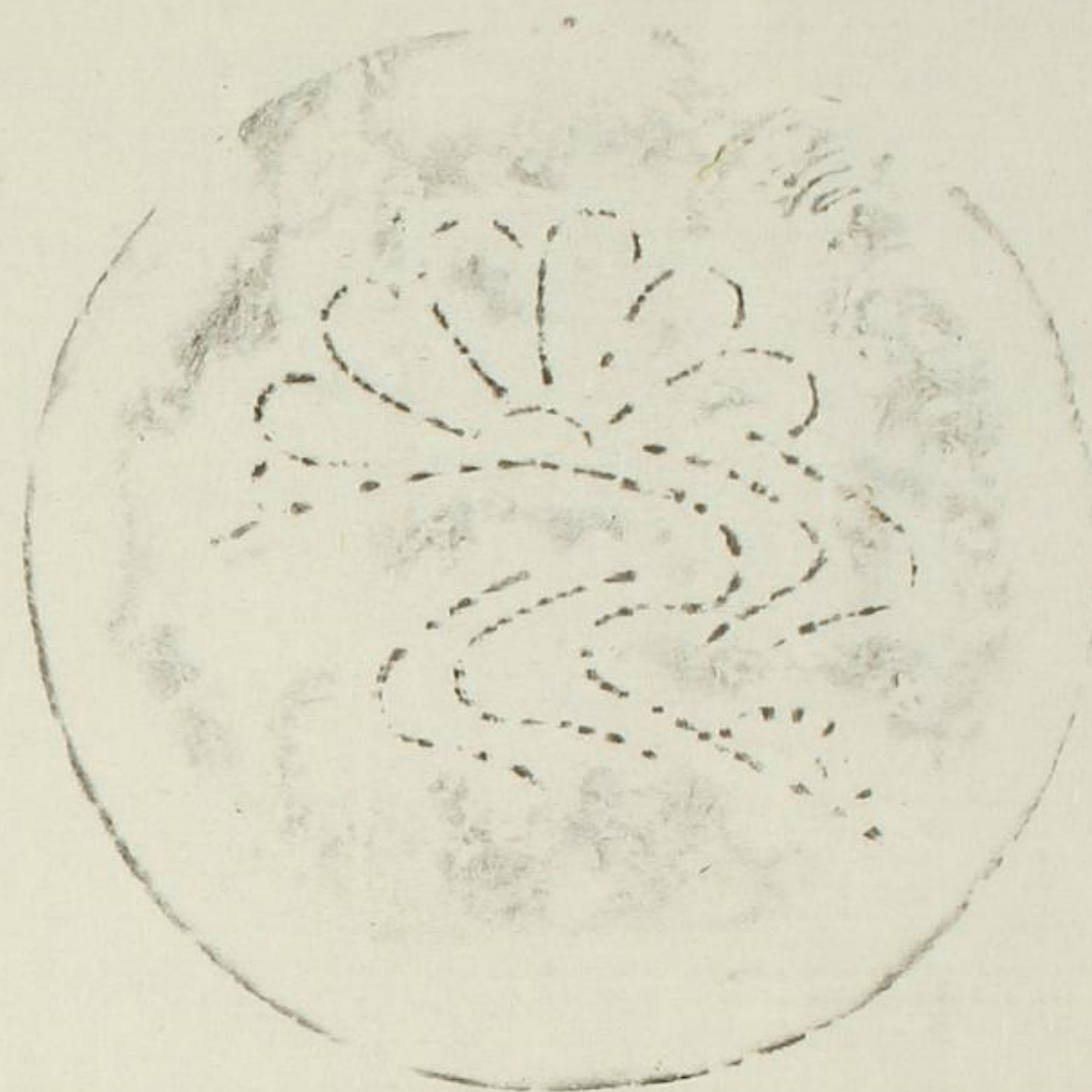
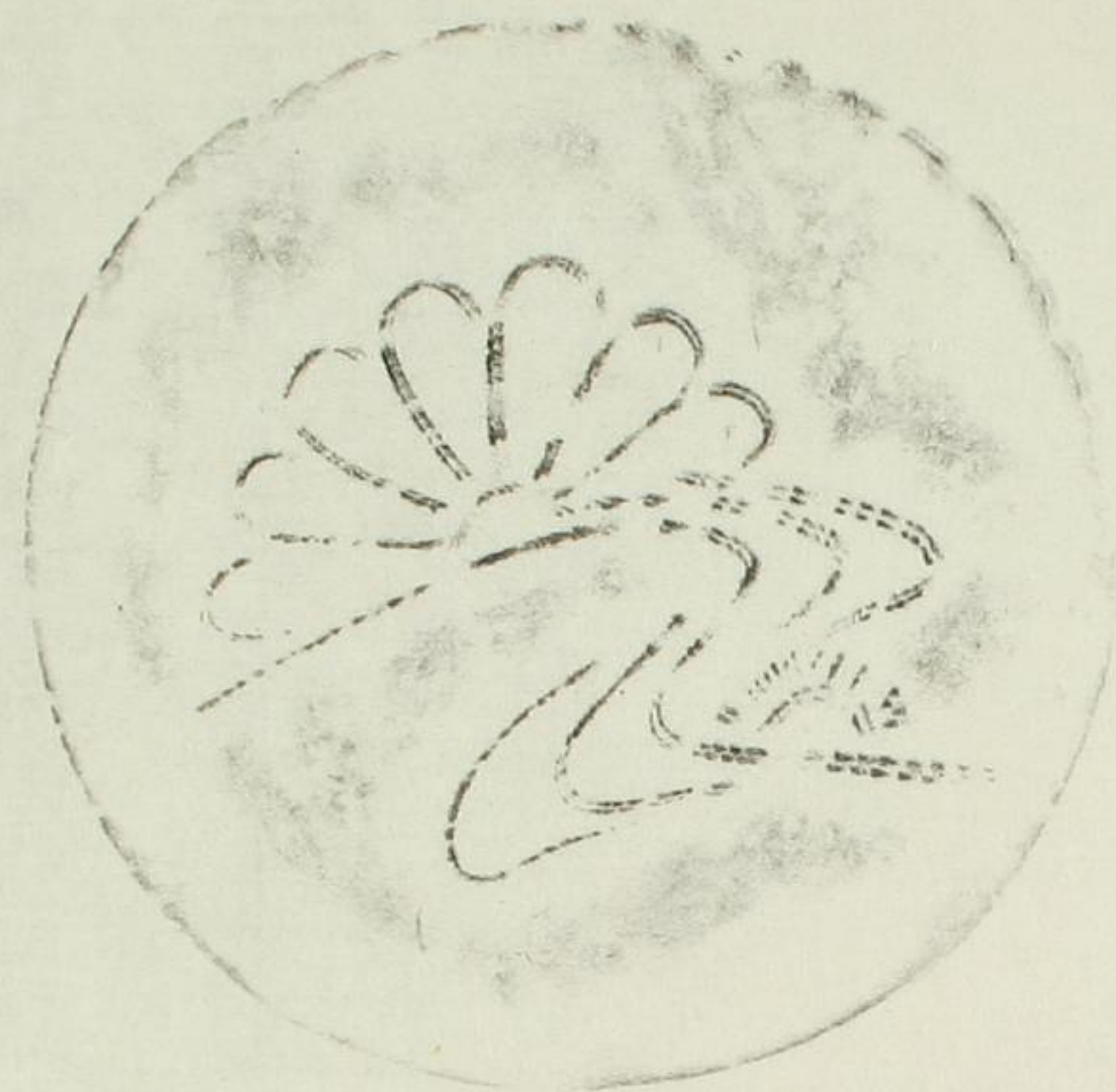
吾人皆の如きが

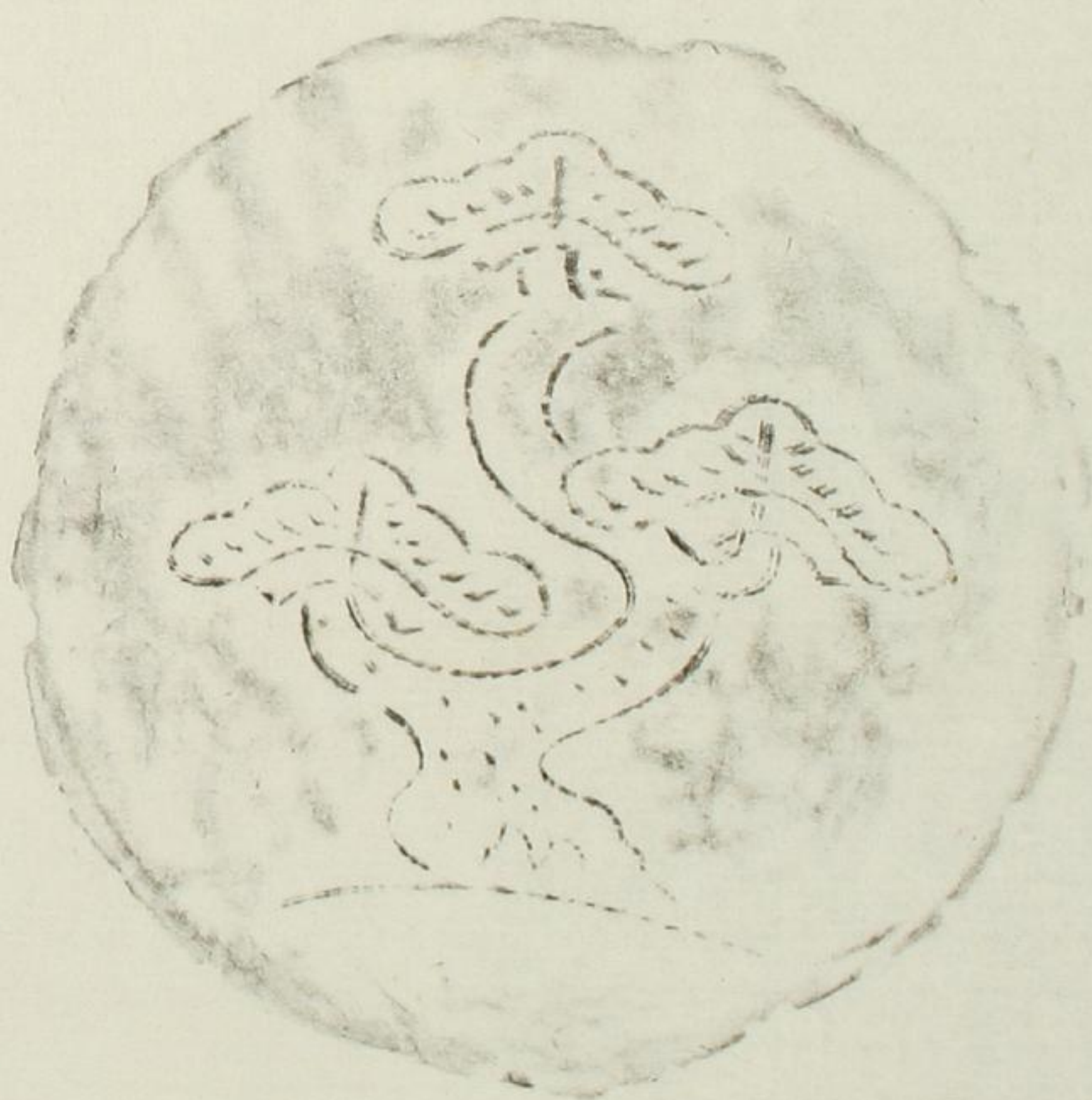
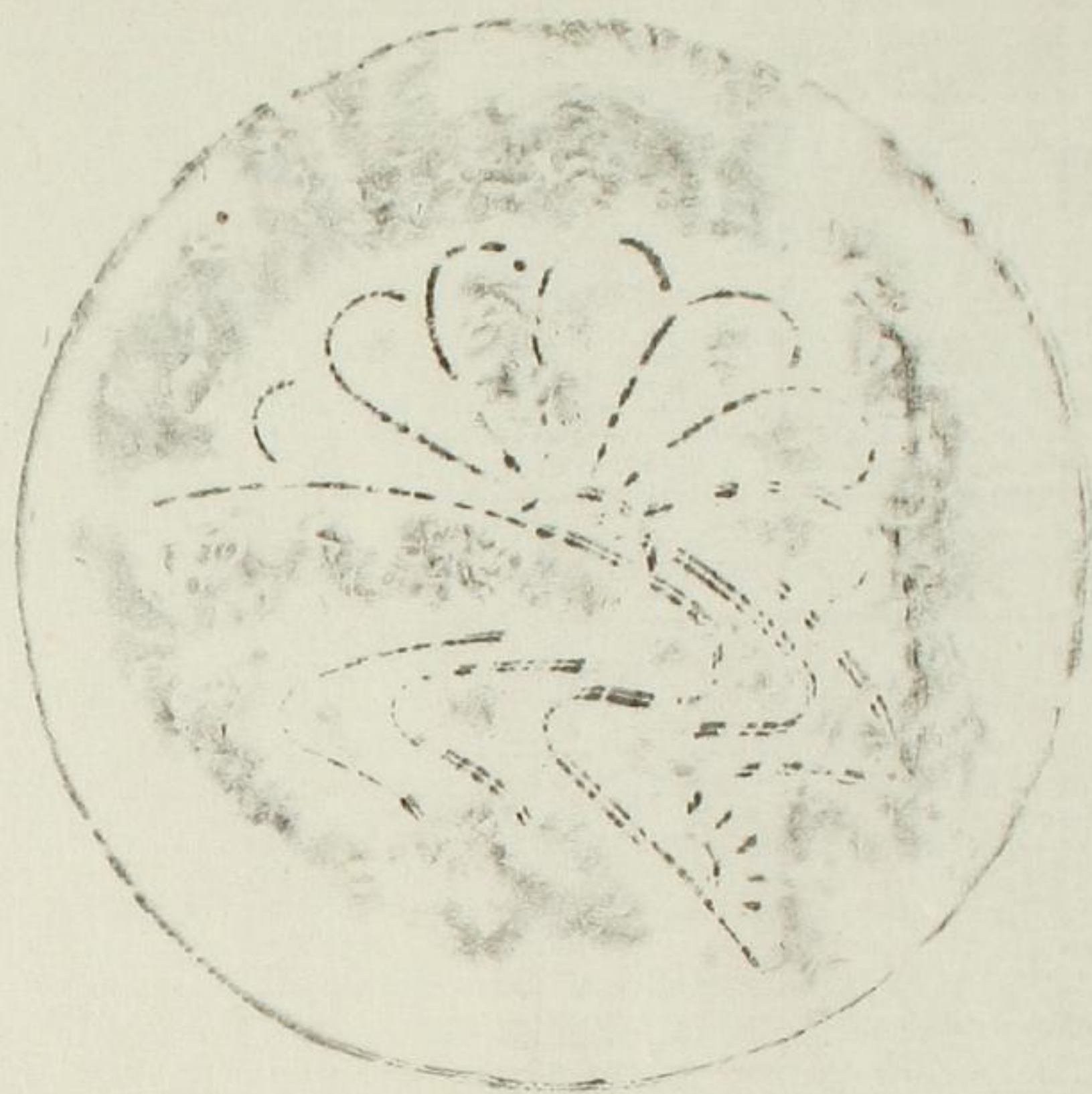
是男益と致すハ云々大に致セシム

長持が舞い永壽を
ひましくとせむ人

かなや
金様く
又りかな
やけくそり果り棄の
みれぬ奴
きつるきぬい同し
剥く皮あるとの意
金様く

此ハ人對する語を重んじて、
 味を以て語る。





盛岡市本町丁竹輪屋上野喜三之製

石陽
長形
の

此瑞之役

本好
古の
臺

見老
城少
京

東の山、西の海、南の方より見れば一帯男根の形なりと云ふは
東京也。此の端嶺も又の二面より右の北へ及び行者の上様
を前にて同様の流ありといふ所の見る所よく行者の路
にちかづきおのり見てさすべし然るの似寄なり

木杵現なる古の墨も東大寺や寶光弘法大
師御用なれし本家煙と銘ある唐紙の墨なり

とうく墨の性も好佳なりともいひたが新近可用
新羅墨といふもの多量良しむといふ

遠く見付可なり也。西の向左方天龍川の岸このま
大きな瓢形塚あり土人京見塚と呼べり特種

共古錄三十七

卷八十九



山東大學
標保一九四



山東大學
圖書館
藏書
一九四

